



コロナ禍で看護職が注目されています。看護師がいなければ、緊急事態を乗り切れないからです。感染者が増える中で、各病院が病床数を増やせないでいるのも、一つには看護師不足が

関係しているようです。一度退職した看護師の中には、臨床の場に復帰する気持ちになれない方もいることでしょう。私が勤務医だった当時、看護部は厳格な規律で統率されており、非常に厳しいチームを形成していたと記憶しています。それに加えて最近の医学の進歩により、さまざまな医療機器が装着される患者が増えており、その機器の知識を持たなければ看護が出来なくなっています。看護師がのどかな看護を行っていた時代は、既に終焉を迎えて久しいのです。厳しい規律の下に高度に専門化した職場、それが現代の看護職の現実であり、復職に際して大きな精神的障壁があることは容易に想像できます。

看護とは一体何かと考えることがあります。例えば医療には、病気を見つけて治すという明確な目的があります。では看護はいかがでしょうか。基本的な看護師の業務を振り返ってみると、体温、血圧、脈拍などの身体チェック、病態に合わせた食事内容等の生活指導、身体機能の維持や筋力低下などの予防のための運動指導、そして採血等の検査、服薬指導などが挙げられます。それぞれは看護師に必須の基本的技術に相当します。しかしよくよく考えてみると、身体チェックは本来は医師の仕事。同様に他の業務も栄養士、リハビリテーション部、検査技師あるいは薬剤師の、それぞれ為すべき仕事ですよね。果たして看護師に特化した専門性はどこにあるのでしょうか。

若かりし頃、看護師の姿に感動を覚えた経験があります。当時私が当直を担当していた老人病院は、終末期に近い患者が入院している施設でした。会話も出来ず、食事も摂れない患者に対して、看護師たちは献身的に尽くしていました。ある日、一人の患者が亡くなった場に居合わせたとき、ふと見ると、亡骸の身なりを整えている看護師たちが、別れの涙を流していることに気づいたのです。驚きました。その病院に入院している患者は、皆様が想像するいわゆる普通の高齢者の姿には程遠く、老いが苦と捉えられる理由が理解できるような、そんな姿の人々でした。そのような姿の、身内でもない患者に対して、彼女たちは誠の涙を流していた

のです。看護師は身体的な激務はもちろんですが、精神的にも常に対人的な最前線で真剣勝負に挑んでいることを学ばされた、忘れることの出来ない記憶なのです。

看護にはその深層に、優しさや寄り添いとは異質の、精神的な働きかけを放つ動性が存在するように思います。当直先で目撃した看護師たちは、私との間に会話すらありませんでした。しかし片隅に佇む私に対して、何らかの間主観的作用を投げかけて、私の脳裡に強烈な印象を残したのです。恐らくあの時の私は、まさしく看護の働きかけを受けたのだと思います。考えてみれば、命を前に驕り続ける医学は、生き方に対して何の展望も示せずにいます。いずれ亡くなる宿命が科されている限り、医学がもたらす恩恵は一時の幻と言っても過言ではありません。一方看護は、正に生き方そのものに働きかけて、人の「いのち」を成熟させる力量を持つように思います。ここに看護の特殊性が際立つのではないのでしょうか。人間を「考える葦」に譬えた天才パスカルは、人間の本質を「天使になろうとすると獣になってしまう」と断じました。それにも関わらず看護師だけはなぜ、白衣の「天使」と呼ばれ続けるのか。その辺りに看護の実相を見出す突破口が隠されているように思えてなりません。



最近「利他」という仏教用語を頻繁に耳にします。他人の利益を第一に考えるということです。看護が利他の精神に基づくことは間違いないでしょう。しかし利他的行為は、優しさや人の好きとは別物です。般若経典の中の一つ『金剛般若経』によれば、利他の精神は他者からの見返りを求めず、自らがやるべきことを愚直に為し続けることと力説されています。この思想に基づけば、看護とは具体的な言葉や行為にあるのではなく、行為の総体をひたすらこなし続ける実践の姿にあるのではないかと思います。患者はそこに癒され、学び、勇気を貰うのです。人は緩徐な死を生きていると言われます。どこまでも生を求めながら死が回避できない。この人間存在の避けがたい矛盾性を顧みれば、人間自体を病める者と捉えることも可能です。もしかしたら看護という活動は、病人というよりも総ての人に対して、すなわちこの日常生活の中にありふれて存在すべき当為なのかもしれません。